

ずいそう



美しく青きドナウ

山 勝 三



音楽の都ウィーンから毎年年初め、世界中のクラシック音楽ファンに素晴らしいお年玉が届けられる。それは全世界に向けてTVで同時中継される新年恒例のニューイヤーコンサート。地元の世界超一流のオーケストラ・ウィーンフィルが、ゲストとして招待した世界的な名指揮者のタクトで奏でる、華やかなウィнна・ワルツや軽快なポルカなど名曲の数々。今や世界のクラシック音楽界最大のイベントの一つになっている。

毎年、そのコンサートのフィナーレを飾るのが、十九世紀のウィーンで大活躍したワルツ王、ヨハン・シュトラウス二世の名曲「美しく青きドナウ」。会場を埋め尽くした聴衆はこの曲の演奏が始まると、盛大な拍手と歓声で、希望あふれる新年の到来を祝福し、コンサートを打ち上げる。

数十年來、この世界同時中継のTV番組のスイッチを入れ、屠蘇気分で見聴するのが、私の新年を迎える楽しみの一つになっている。

あれは今から六十年近く前の中学校の音楽教室。先生が珍しく古びた手回しの蓄音器を重そうに抱えて入って来た。何事ならんと生徒たちの目が注がれる中、蓋を開けて中から手回しのハンドルを取り出し、ゼンマイを巻く穴に差し込んでグルグルと回し始めた。そしていっばいに巻き終わると、茶色に変色したカバーから一枚の古びたレコードを取り出し、溝に針を落とした。ガリガリと溝を擦る雑音に続き聞こえて来たその曲に、かすかに聴き覚えがあった。そして聴き進む内なぜか懐かしさと切なさが込み上げ、胸がジーンと熱くなるのを覚えた。

七、八分ほどの曲がアッという間に終わった。すると先生が突然「誰かこの曲の名前を知っている人」と質問した。私はなかば反射的に手をあげ、うろ覚えながら「美しく青きドナウ」と答え、たいそう誉められた。

戦後間もない当時のNHKの放送で、日曜日の朝『音楽の泉』という数少ないクラシック専門の番組があった。雑音だらけの古びた真空管ラジオから流れる名曲は、音質こそ悪かったが、毎週、楽しみにしてよく聴いた。この曲は多分そのとき子供ながらに心に残った忘れられない一曲だったのである。

この音楽室での出来事を契機にクラシック音楽がいっそう好きになり、爾來六十年、私の日々の生活に

無くてはならない潤いと安らぎを与えてくれる、貴重な存在となった。後年、コマツに入社し初めて貰ったボーナスは、当時まだ高価だったレコードプレイヤーに、そっくり化けた。恐る恐る針を落として聞こえて来た最初の音に、胸をときめかせたあの日の興奮を、半世紀余を経た今でも昨日の出来ごとのようにはっきりと覚えている。

今を去る十年ほど前の初夏、モーツァルト生誕二百五十周年記念に湧く音楽の都ウィーンを、妻と二人で訪れた。その現地での二週間ほどの滞在中、毎年ニューイヤーコンサートが開催されているウィーン楽友協会ホールの黄金の間で、地元オーケストラによる演奏会を聴く機会があった。

プログラムが進み最後に「美しく青きドナウ」の演奏が始まると、突然、六十年近く前の古ぼけた中学校の音楽教室にタイムスリップ。世界最高の音響効果を誇るホールでの、超一流オーケストラによる華麗な響きと、古ぼけた木造教室での、手回し蓄音機から聴こえる雑音混じりのレコードの音が重なり合い、何とも懐かしく胸にジーンとこみ上げるものがあった。

ウィーンを去る前日、郊外を流れるドナウ河の観光クルーズに出掛けた。遠くアルプス連山に源を発し、オーストリアを横断して遥か黒海に流れ下る、ヨーロッパ第一の大河ドナウ。しかし、期待した「美しく青きドナウ」は、そこに見ることは出来なかった。観光船から見下ろす広い川面は時代とともに河岸周辺の開発が進んだためだろうか、曲名のように青くはなく薄茶色に濁っていた。今を去る百数十年前、シュトラウスが見た「美しく青きドナウ」は、今、彼の名曲の中でしか、出会うことが出来なくなってしまったのであろうか。

船内では、かの名曲が繰り返し飽くことなくスピーカーから流され、観光船はゆっくりと薄茶色に濁るドナウ河を、ウィーン目指して下って行った。思い立って船室から北国の初夏の日差しがまぶしいデッキに出て手すりにもたれ、試みに目を閉じてみた。すると、かつてシュトラウスが目にしたであろう、さざ波の立つ「美しく青きドナウ」が、曲に乗って鮮やかに臉の裏に浮かんで来た。